いのちと地域を守る

語り部から

仙台市太白区・元仙台市東二番丁小校長　今野　英二さん（63）

避難所の統率は大変

仙台市青葉区の東二番丁小は、JR仙山線から約500メートルの場所にある、都心の学校です。震災発生直後、駅や商業施設などから頼めて出された人が1000人以上に、校庭に押し寄せました。

雪が降り始め、「校舎の中に入れろ」という声が上がりました。阪神大震災の教訓から、いったん避難者を教室に入れると、学校の再開に時間がかかると聞いていたため、むやみに教室を開放することもできません。400人に近くの小学校に移ってもらいました。

夜になって市から教室を開放するよう指示があり、ほぼ全ての教室や廊下を使って約800人を泊めました。民が少ないため、地域のサポートが期待できません。小のような都心の場合、住民が少ないため、地域のサポートが期待できません。

設されました。

避難所運営には、集団を駆使した自主的な運営がどのようにまとめるかが大変でした。食事の配給や掃除など、教室ごとに当番を決め、避難者にも当事者意識を持ってもらいました。

小学校は避難所に指定されていますが、帰宅困難者のことは考えていませんでした。行政も同じだったと思います。さらに、東二番丁小は、住宅地の中にあり、近所に勤務者が多い。特に夜中に停電した時、避難者が心配だ。

■長井連合町内会副会長・川島進さん（66）

【参加して】非常持ち出し袋を高台の倉庫にあらかじめ置いておくのはいいアイデアだ。食料の賞味期限に合わせて住民が集まり、食べる機会をつくり、防災意識を高めるのもいかもしれない。

■東町内会・木賀信勝さん（66）

【震災時の経験】震災当日、消防車両で避難を呼び掛けて回ったが、ほとんど避難してくれなかった。停電したため、心臓ペースメーカーを使っている人や小中学校に発電機を貸した。

■長井地区消防団副団長・嘉山準次さん（65）

【緊急時の不安】自宅は標高4、5メートルの場所にあるが、海は怖いので津波の被害を受けるのではないか。病院など市内の大規模な施設が低地にあるのも気掛かりだ。

■長浜町内会長・沼田弘一さん（58）

【震災への備え】町内で、80歳以上の高齢者を対象にした避難訓練を年に2回実施している。どの人がどのくらいの時間で避難できるかをチェックし、遅い人は近所の人が迎えにいく。

■長井連合町内会長・原忠さん（78）

■むすび塾に参加して

神奈川・横須賀市長井地区

【緊急時の不安】震災当日、地区内の被害や海の状況について全く分からなかった。今後、大地震が起きた時、地元の情報は入ってくるのだろうか。いざという時は自分で情報収集するしかない。

■漆山町内会長・近山通正さん（71）

【緊急時の不安】地区内に大きな公園があり、運動は普段から渋滞している。こんな状況で非常時に車で避難できるか、考えただけでぞっとする。

■井尻町内会長・熱田孝一さん（65）

【緊急時の不安】自宅は団地の中にあり、近所に勤務者が多い。特に夜中に停電した時、避難が心配だ。

■長井連合町内会副会長・川島進さん（66）

【参加して】非常持ち出し袋を高台の倉庫にあらかじめ置いておくのはいいアイデアだ。食料の賞味期限に合わせて住民が集まり、食べる機会をつくり、防災意識を高めるのもいかもしれない。

■東町内会・木賀信勝さん（66）

【震災時の経験】震災当日、消防車両で避難を呼び掛けて回ったが、ほとんど避難してくれなかった。停電したため、心臓ペースメーカーを使っている人や小中学校に発電機を貸した。

■長井地区消防団副団長・嘉山準次さん（65）

【緊急時の不安】自宅は標高4、5メートルの場所にあるが、海は怖いので津波の被害を受けるのではないか。病院など市内の大規模な施設が低地にあるのも気掛かりだ。

■長浜町内会長・沼田弘一さん（58）

【震災への備え】町内で、80歳以上の高齢者を対象にした避難訓練を年に2回実施している。どの人がどのくらいの時間で避難できるかをチェックし、遅い人は近所の人が迎えにいく。

■長井連合町内会長・原忠さん（78）

名取市閖上・会社員　小斎　誠進さん（45）

まず逃げる意識必要

津波が来る前後の閖上の様子を撮影し、震災後に写真集にまとめました。地震の後、消防団から津波警報が発令されたと聞きましたが、すぐに逃げるほどの危機感はありませんでした。住民の多くが、同じような状況だったと思います。

地震の後、貞山堀の水門を下げる作業を手伝っていたが、堀の水が引いてきたことに気付きました。ようやく自分自身の避難のスイッチが入りました。

つぶれた海の方から黒い土煙が上がっていると聞き、小学校に駆け込んだ。一大丈夫だ」と言って逃げない方もいました。せっかく避難したのに、家族や自宅が心配だと言って再び戻り、亡くなった人も少なくありません。

それぞれが無事なら、家族とはいずれ、落ち合えるのあちこちで見掛けた住民の多くが犠牲になりました。日頃から想定し「避難が先決だ」という認識を浸透させてください。

減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

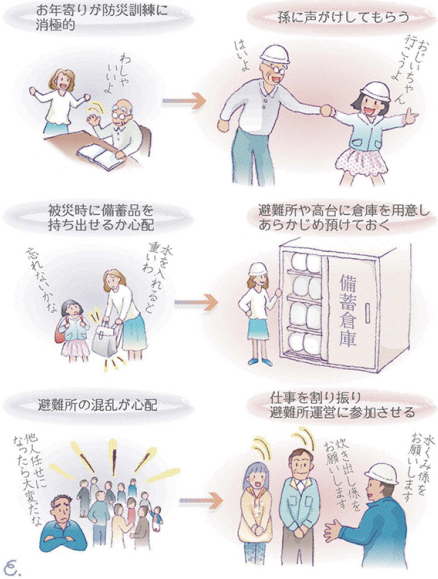
次のリーダー育成を

長井地区は、町内会長や住民組織のトップが強力なリーダーシップを発揮し、地域にまとまっている。80歳以上を対象にした避難訓練はユニークな試みで「防災先進地」と言える。

一方で、不安もある。東日本大震災では、住民組織の防災に熱心な人が犠牲になったケースがあった。災害時の役割を事前に決めておくことは大事だが、「あのようなやってやる」という雰囲気が、行き過ぎた要求に変化しかねない。

避難誘導や救出、備えが失敗した事例は幾つもある。トップが代わってもリスク管理は変わらない。今のうちに、次代を担う若い人を育てようという視点も大事になってくる。

防災・減災対策のひと工夫



東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に、地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の「むすび塾」は24日、宮城県亘理町の旭台町内会で開催します。